



「県南地域にもがん患者の輪を」と見山さん

輝いています

ひと

キャンサーフラ 講師
見山 磨希子 さん

がん患者に寄り添うフラを

「人生に輝きを取り戻してほしいです」と語るのは、がん患者のためのフラダンス、「キャンサーフラ」の講師として活動している見山磨希子さん（56歳・中央5丁目）です。長くつらい闘病生活を送るかたがたの心と体を元気にするため、日々奮闘しています。見山さん自身が乳がんを患ったのは10年前。手術や抗がん剤治療により、脱毛や吐き気といった副作用や上がらなくなった腕のリハビリが続きました。更に1年後には腕がむくんでいくリンパ浮腫に。不安で押し潰されそうになか、まちなかでふと目にしたのが、現キャンサーフラジャパン代表の草野朋子さんが大宮で開

講する教室の案内でした。少しでも気分が晴れたらと始めてみると、仲間たちと衣装を着て音楽に合わせて踊るなかで、自然と笑顔があふれてきました。楽しく続けることで、徐々に腕も上がるようになり、リンパ液の流れがよくなったのか、気づくとむくみの悪化も抑えられていたのです。いきいきと踊ることので不安が薄らいでいった見山さん。「今度は私が悩んでいる人の力に」との思いが芽生え、アシスタントを経て7年後に講師に。レッスンは椅子に座って踊るなど一人ひとりの体調に合わせて練習を心がけるとともに、休憩中には生徒との交流を欠かしません。脱毛の悩みを相談されたときは蔵市在住の再現美容師、毛内英克さんを紹介するなど、同じ境遇にある者として、気持ちのケアもたいせつにしています。来月24日からは、市民体育館で教室を開講し（お知らせ版2ページ）、「一人でも多くの人にキャンサーフラを伝えたい」という夢の第一歩を踏み出します。病と向き合いながら明るく前向きに生きるその姿は、きっとがん患者の心に再び希望の光をともすことでしょう。

今月の河鍋暁斎記念美術館

天才絵師の作品 蔵にあり

—No.67—

明治7年（1874）、暁斎が十二月の風物を「一気呵成」に描いた十二幅揃いの席画のうち、十二月を描いた作品です。一年の邪気を払うために豆を撒いて鬼を追いかける「追儼式」が描かれています。「追儼式」は大晦日に行われる宮中行事でした。それが後に民間の節分と結びつき、立春の前日に豆を撒く行事となったと考えられています。小槌を福女から盗み、顔を隠して逃げ出す鬼がなんともユーモラスな作品です。

河鍋暁斎記念美術館 開催中(12月22日まで)

「暁斎が描いた『忠臣蔵』と芝居絵」展
同時開催 「『暁斎百鬼画談』の世界」展

開館 = 午前10時～午後4時 ところ = 南町4-36-4
休館 = 火・木曜日、毎月26日～末日、年末年始
入館料 = 一般600円 高校生・大学生500円 小・中学生300円
65歳以上500円

※65歳以上の人は年齢の分かる物、学生は学生証のご提示を

詳細 = 同館 (☎441-9780)



詳しい内容は美術館のホームページをご参照ください



現在の茨城県古河市に生まれる。浮世絵や狩野派を学び、江戸・東京の庶民から人気を博す。明治9年、万国博覧会に肉筆画を出品。14年、内国勲業博覧会で日本画の最高賞受賞。娘の暁翠も日本画家。



かわなべ きょうさい
河鍋 暁斎
天保2年（1831）
～明治22年（1889）



本作品は現在の展覧会で御覧いただけます

暁斎筆「月次風俗図 十二月 福女豆撒き図」
明治7年 紙本墨画淡彩 軸装